第 4 章　教科書教材の加工と活用

1.　指導の背景

1)　教科書の重要性

①　有用でかつ重要なインプットの提供

…教室での授業も自宅学習も基本的には教科書教材が中心であり、学習者にとって有用でかつ重要なインプットになる。

②　組織的文法学習を保障

…教科書は、文法項目をより組織的・体系的に学習できるように編集されているので、組織的な文法学習を保障できる。

③　教室内・外での学習の基盤(scaffold)を提供

…英語が苦手な学習者はまず教科書を理解する指導を受け、経験の浅い教師は教科書を中心に指導する。「英語が使える日本人」になるには教科書以外にもその応用を考える必要があるが、その際基盤になるのはあくまでも教科書である。

④　教師による教材開発の基盤を提供

…教師は、教科書に含まれているもの以外に手作りの対話や練習問題をつくる必要があり、その基盤となるのは教科書である。

⑤　教室内コミュニケーションの触媒(catalyst)

…教師・学習者間インターラクションを体系的に行うのは難しい。まずは、教科書教材に即して行うことで、容易、かつ継続的なインターラクションが可能になる。

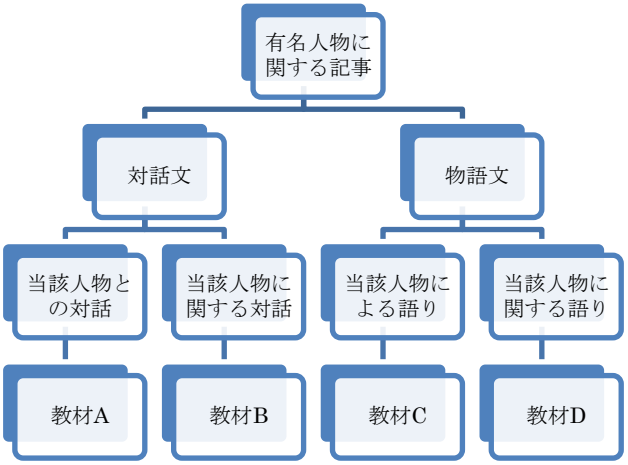
⑥　教師の個性の表出(個性に応じた使い方)

…教科書それ自体は全国全く内容は同じであるため、教師のアレンジによって自己の個性を発揮することになる。

2)　教科書編集プロセスを参考に加工を考える

教科書を加工する際には、教科書編集プロセスを参考にすることができる。

たとえば、「有名人物に関する記事」の場合、以下のようなプロセスができる。



教科書教材の加工と活用を考える際は、教科書に採用された教材の背後にいつも残りの3つの教材が使用されずに残っていることを意識することが肝心である。

2. <u>指導の実際</u>

1) 対話文を物語文に変換

教材の談話モードの変換。

例）P54、55

教材 A：日本の中学生が学校新聞に載せる記事のために日本のきた留学生にインタビューをしている教材

⇓ …[手がかりとなる質問]

教材 D：インタビュー者になりきって留学生を読者に紹介する形

☆生徒たちに無意識に A から D に変換させ、多くのアウトプットを引き出すことがポイント。生徒はもともとの対話教材に含まれている情報をどの順番で並べることが適切かを考えなければならない。コミュニカティブ・アプローチの指導原理である information transfer(Johnson,1982)が組み込まれた活動で、単なる繰り返しよりコミュニケーションに近い活動。

2) 物語文を対話文に変換

例)P56、57

教材 D：地雷撤廃運動家である Chris Moon の生き方を示した物語文

⇓

教材 A：生徒たちが Chris Moon にインタビューを行う対話文

☆英語を話すことが苦手な日本人には必要な活動で、教師自身の英語力を維持する上でも

有用。

さらに、生徒たちに書き換えさせるのではなく、教師が前もって対話文を作成しておくことも可能。

例)P58、59

教材 D：Steve Wonder の生い立ちを綴った文章。

⇓

教材 A：本文を参照しながら対話文中の空白に適当な語彙を補う、インタビュー形式の対話文

☆本文を注意深く読む必要があり、リーディング教材をより身近な教材にさせることができる。受身的なリーディングではなく、アクティブなリーディングへ。